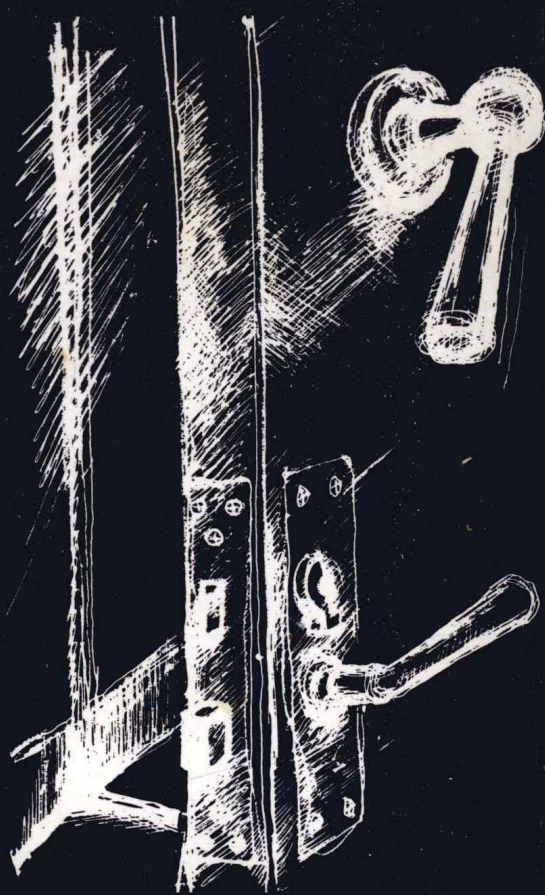


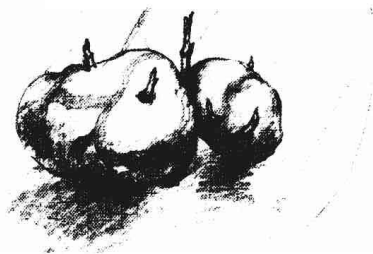
春を待つ病棟



森たかみち

春を待つ 病棟

森たかみち



森 た か み ち

明治41年名古屋に生れる。

メリヤス店奉公をよりだしに土工、仲仕、高職などを転々とし、昭和29年より43年まで精神病院に看護人として勤務。

現在アパート管理人。禪による裸運動「六雅会」会長。童謡詩集「裸の神さま」、歌集「妻は遠く」、小説集「針ノ木峠」、随筆集「はだかのくらし」などの著作があり、また昭和38年、「滅びの光」によって第8回中央公論新人賞次点となる。

現住所 〒564 吹田市出口町13番7号



春を待つ病棟

昭和52年1月10日 印刷

昭和52年1月20日 発行

定価 950円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著 者 森 た か み ち

発行者 佐藤今朝夫

制作・斎藤弘子

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷株式会社 製本・青木製本

序

一九五八年十一月六日、新聞は、「精神病患者、看護人を絞殺、看護婦に暴行」という見出しの記事を載せた。

——五日夜、名古屋市千種区の精神科、月カ丘病院（真杉茂夫院長）南第一病棟のチェレ（狂暴患者を保護収容する個室）で、看護婦、春名あさみ（仮名）さんが、患者、江南市古知野広見、久留島文三（三十一才）に暴行されて失神しており、看護人、山城猛さん（四十九才）が患者、中川区中郷町四丁目、結木秀人（二十五才）に首を締められて死んでいるのを、宿直の看護長、片山省吾氏（三十六才）が発見した旨、千種警察署に届出があった。

二つの事件は偶然同時に起きたのか、それとも二人の患者によって企てられた一連の事件なのか。それについて、精神病院内の特殊性に詳しい片山氏は、二人の患者の共謀といっている。そういう共謀のできる患者をチェレへ入れていたことに不審が持たれるが、これにも部外者の立入りできない特殊な事情があるらしい。

月カ丘病院は南第一（男子）病棟。

南第二（女子）病棟。

北第一（男子）病棟。

北第二（女子）病棟。

東開放（男女混合）病棟。

の五病棟に約三百名の精神病患者を収容する創業の古い病院であった。名古屋市の東郊外、覚王山日泰寺から、古沼の点在する猫カ洞へ続く丘陵地帯にあり、市街地の雑踏から隔った閑静な地にあった。

東病棟（開放）と本館（玄関、医局などがある）が鉄筋二階建の新館であるほかはすべて、まるで地をはうような木造平家建の病棟で、さらにそれをコンクリート塀が囲んでいた。

新館の東側に草土手に囲まれた低地なグラウンドがあり、解放（軽症）患者が野球をやったり、バレーボールをやったりしていた。職員、患者合同の野球大会、盆踊り、大運動会が各々年に一度レクリエーション療法と慰安とを兼ねて行なわれ、大運動会には閉鎖病棟の患者（重症、末期症）も参加した。

グラウンドには絶えず草が生え、その草むしりは作業療法として相当末期症状の患者にも適していた。

本格的作業療法としては、コンクリート塀の南側を流れる小川を隔てて広い農園があり、二人、三人の農園指導員と十人あまりの患者の働きによって、みかんやぶどうや草花が栽培され、それらを屋外作業といい、日やけた患者が裏門の小橋を渡って通った。

室内作業としては、東病棟の階下の広間で、市内の業者から持ち込まれるクリスマス用の飾り物や玩具の簡単な部分工作をやり、解放患者男女四十人ほどは、午前午後を通じて四時間、ここで働いた。作業机も長い腰かけも、安い工賃でやってもらえるということで、業者がサービス提供したものであった。

東病棟は作業療法のセンターであると同時に、レクリエーション・センターでもあった。コーラス部があり、民謡舞踊部があり、大運動会の小道具やカーニバルの工作物は、看護人（生活指導員ともよぶ）の協力とここの患者によって作られた。

コンクリート塀には次がはわ^{いづ}せてあり、春には直径七、八センチの白い花が咲き乱れて、一見のどかな外観を呈していたが、その花の蔭の青い棘はひそかに患者の脱走を防いでいたのである。それでも入院の意味を理解しない患者によってこの茨は時々踏越えられた。

作業やレクリエーションが患者の社会復帰に役立つであろうということはまだ立証されていない。それも病状と家庭事情との兼合いによって、選ばれた少数が対象となるだけで、大半の患者は陳旧化していき、完全に人格崩壊をとげた者は、塀の外を想像することもなく、あるいは遠い

記憶のまま変化を停止した風景の中へ降りたがった。

厚生省では患者六名に対して看護者一名、及び看護者十名中、有資格者八名という比率を定め、これに合致するものを完全看護（一級）病院とした。この病院には五十名の看護員が必要であり、そのうち四十名が有資格者であるべきであったが、看護婦の全国的な不足の上に男子看護員を養成する機関がなく、経験者の検定試験制度も廃止になって、実際には完全看護病院の資格が剝奪（はくだつ）されるほどの欠員であり、二級病院に落とされれば治療費、入院費が安くなり収入は半減するのである。

これは月カ丘病院に限ったことではなく、ある病院は全快したアルコール中毒患者に白衣を着せて員数を合わせた。

男子といえども看護婦学校へ行けばよいというのは机上論で、男子看護員を必要とするのは精神科の男子病棟に限られており、精神科の看護員に必要なのは「医学」よりも「心理学」であり「腕力」であるという事情があつて、精神病院の看護体制は混乱していた。

大阪府の精神病院協会が、全国に先がけて男子看護員の講習会を開き、試験合格者に「精神看護士」という肩書を与えたことがあるが、看護婦協会の反対にあい厚生省が認めないまま、意味なく終わってしまった。

日本の医療行政はかつて、癩対策、ついで結核対策を成し遂げた。次は精神病対策といわれて

いたが、戦後、癌対策が先行し、またしても精神病対策は置去られた。

精神病は病氣であろうか？ 病氣とは治癒するか死ぬか、するものだが、精神病は治りもしないし、死にもしない。精神病院では患者を退院させるときにも「全治」という言葉を使わず「寛解」と称する。「病状がゆるやかになった」という程の意味である。

退院した「寛解患者」は必ずといっていいほど再発、再入院してくる。その時は以前よりも病状は一層悪化しているのが常である。退院と再入院とを繰り返しながら慢性化していくのである。作業療法の中の優等生も、社会へ出ればたちまち落伍するのである。

精神病患者は従来「檻の中の人種」であった。「救い」はあるのだろうか……。わずかに考えられるのは「檻」を「柵」にひろげること。そこには太陽と緑と「肉体だけで存在する幸福」が期待されるだけだが――。

現実には医療行政を待たずに、精神病自らが「檻の中の性」を作り上げている。「檻の外の常識」がどのように分析しようと「救い」はなければならぬ。

昭和五十一年九月二十日

森 たかみち

目次

序	1
第一章 白濁	9
第二章 刺青	29
第三章 虐待	53
第四章 汚点	69
第五章 雪の日	79
第六章 幻影の美	97
第七章 画集	115
第八章 蔓ばら	125
第九章 娑婆	141
第一〇章 恍惚	157

第一章	山麓	171
第二章	空に描く	191
第三章	鍵	203
第四章	屈辱	213
第五章	沖縄の画家	227
第六章	メノコ	241
第七章	滅びの影	255
第八章	チェレ (Zelle)	269
後記		281

第一章

白

濁



螢^{ほたる}を売る屋台店の前で、結木秀人は後戻りした。ちらと見たときほどではなかったが、それでも横に張ったたくましそうなあごの具合や、太く短い眉、腫れぼったい一重瞼まで、父に似ていた。裸電球の薄暗い芝居小屋裏におそくまでたゆたっている夕明りの中で男は、ふとこちらを見てにやり笑った。笑うとその顔はにわかに本来の白痴のそれに崩れてしまうのはやむを得なかった。

立ち小便をすまずと、パンツをはいていないようすで、久留米紺の単衣の裾をはらりと手放した。年恰好がよくわからなかった。二十二、三にみえるし、角度を変えれば三十四、五にもみえた。秀人はあまり見つめては悪いと思って反対側を向いた。と、パチンコ屋のネオンの上に満月に近い月が出ていて、その白い月の表面に例の男の斜め向きのシルエットが映った。厚い唇の形が父に似て――。

月を見ながら歩いたらしく、ふり返ると男の姿は五、六〇メートルほど、むこうにあって、剣戟の真似をしているのが、往来する人々の合間から時々みえた。話しかけてみたくなって、また戻ってみたがもうその場所にはいなかった。行きずりの浮浪者に執着しすぎる自分の感情が自分で氣まり悪くて、実はその方がよいと思ひながら、ある種の寂しさが胸に残った。

妻に話して笑われたので、再びいい出しはしなかったが、腹違いの兄か弟に相違ないと思われるかの白痴に会いたくて、秀人は社が引けると大須辺をさまよい歩かずにはいられなかった。

一度その場所で見たからといっていつもそこにいるわけではないのに、芝居小屋裏には欠かさず行ってみた。同じ場所で立小便している男があると、緊張して立ち止まるのだが、秀人の暗影に合わない貧弱な年寄りであつたりした。

仕事中にも製図の線と線の間から、豆粒大の彼の顔がでてきて、シャボン玉のように大きなってはパチンと割れて消えた。会えないでいるので、その顔からは白痴らしい影が薄れていき、秀人自身よりも強く父に似た顔付が、考えているうちに父と同じになってしまう。土建会社の社長で、特殊飲食店のおやじで、同時に市議員であることを渾然と漂わせている父の高慢な口ひげすら、いつのまにか彼の顔につけていた。

彼のことを思うのと同じ比重で、あの月に映ったシルエットのことが秀人は気になった。月に地球の影が映って月蝕を起こすことはあっても、ある街の特定の人間の顔が映るなどはありません。しかし秀人はこの眼ではっきり見たのである。

富山県魚津の屨気楼や、有明海の不知火や、登山者が見る御来迎に類する科学的現象で、いまだ今日の科学で発見されていないものが、この世界に存在するのではないか。それを自分が偶然に見たのではないのか。御来迎は、三人いても五人いてもその中の一人だけにしか見られない限られた一つの地点があるという。大都会の真中で自分にだけ見えた、そういう現象がないとは断言できないのではないか？ 月令と時刻と地点と、それを見た自分と、それを映したかの男の位

置の幾何学的關係を、全く同様にすることができたら、あるいは……。

秀人は奇妙な興味と興奮に駆られた。そのことは妻には理解してもらえない問題だと思って話さなかった。ただ、かの白痴男が、おれの異母兄弟だという想像は、父の行状からして根拠のないことではない、と秀人は考えた。

自分の情婦をそそのかして面白半分に、高校生であった秀人の童貞を奪わせた父である。母が子宮に肉腫ができ、手術の経過が悪くて死ぬと、一と月たたぬ間に、若い後妻を迎えた父である。「秀ちゃんが見るわ」という声が、いまでも秀人の耳の奥に残っている。いつのことであつたか、どこであつたかわからない。ただ、白い明るい蚊帳の中であつた。女は、母ではなかつた。その時の父の姿は、土方たちの喧嘩を裁いているときのあの、多分に虚勢を張った芝居がかったものよりは、はるかに本質的な男らしさに輝いていたことを秀人は忘れないのである。

秀人は自分が大須の白痴の上に、父のそういう男らしさを複製しようとしているのではないかと恐れた。精神の稀薄であるあの男は、純粹にその美しい肉体だけで存在している。だから……と疑って慄然とすることがあつた。が、そうではない、血のつながりが互いに作用し合う引力に相違ない、と思つてほっとするのだつた。

一カ月後の陰曆十四日、(あの日の月令は確か十四日だったから) 退社の時間を少し無理して早目に大須へ回つた。パチンコ屋の看板の上はまだ青空で、この前と同じ位置まで月が昇るには

だいぶ時間があつた。

秀人は市村座の表で、片肌脱ぎになつた侍が大刀を振りかぶっている座長の等身大に引き伸ばしたスチールを見ていた。少しも力こぶのない、女のような腕を一体何のためにさらけ出しているのだろう、と思つた。彼等がその男性的魅力によつて女客の人氣を集めようとする意に反して、いたずらに貧寒とした生活の臭氣ばかりが滲み出るのに、——と思つている秀人の目の前へ、不意にあのずんぐりとした体が、一カ月前のままの暑そうな久留米緋に包まれて現われた。

端役のかぶる安物のちょんまげを、いが栗頭の上に乗せて、片手を懷ふところに入れ、一所懸命に氣取つた顔をしていた。

「安さん、へえー、二枚目だなも……」

木戸番の女がからかうと、

「コンドウ、イサミ！」と威張つて、その前を通りすぎた。変に体をよろよろさせるのは酩酊めいていのつもりらしい。彼は雑踏を縫いながら、時どき立ち止つてはあたりをにらみまわした。勤王党の侍にでも会つたのか、突然「えいっ！」と大刀を抜くしぐさをした。正眼に構えて、少し汗ばんだ頬を、アイスキャンデーの色提灯が照らした。楽器店で鳴らすマンボのかき乱すようなリズムを耳にも入れず、彼は爪先いざりにつめより、「えいっ、えいっ！」と左右に斬り払つた。凄じく着物が乱れて乳首がのぞけた。